立教170年（平成19年／2007年）3月11日号

安治川親方ら4人おさづけの理拝戴

大相撲・安治川部屋の親方と関取ら4人がおさづけの理を拝戴し、6人が中席を運んだ。

ようぼくとなったのは、安治川親方（46歳・元横綱旭富士＝写真右上）、安馬関（22歳・東小結＝同左上）、安美錦関（28歳・東前頭九枚目＝同右下）、智ノ富士さん（29歳・西三段目七十二枚目＝同左下）。

安治川部屋は28年前から、三月場所の際に明愛分教会（森田定之会長・大阪市東成区）を宿舎としている。部屋の力士らは毎年、三月場所の初日前に本部神殿に参拝し、別席を運んできた。

安治川親方は「別席を通して教えに基づく心の使い方などを学んできた。これを稽古に生かし、師弟一丸となって相撲道に精進したい」と抱負を述べた。

昨年の五月場所以来、5場所ぶりに小結に返り咲いた安馬関は「力士としては勝負を最優先しなければいけないが、一人のようぼくとして、周囲に喜んでもらえる存在になりたい」と語った。

安美錦関は「ようぼくになるまで時間がかかった分、学んだことを積極的に取り入れ、早く上の番付に戻したい」と。

中学時代に合宿で親里を訪れたことがあるという智ノ富士さんは「今日から、また新たな気持ちで頑張りたい」と話した。

この日、4人は前真柱様を訪ね、激励を受けた。

平成14年に、ひと足早くようぼくとなった安壮富士関（31歳・東十両七枚目）を含め、〝ようぼく関取〟3人を擁する安治川部屋。「荒れる大阪場所」の異名をもつ三月場所（3月11～25日）、安治川勢の活躍に期待がかかる。

〝はたらく〟ようぼく訪問

あいさつ・礼儀のできる子は伸びる

大相撲・安治川親方（元横綱・旭富士）

大相撲三月場所の間、安治川部屋の力士は大阪市東成区の公園で黙々と稽古に打ち込む。場所前に稽古場を訪ねると、体がぶつかり合う音の大きさに圧倒された。かつて、この厳しい勝負の世界で頂点に登りつめた男は、いまどんな思いで弟子たちを育てているのだろうか。

◇

――相撲を始めたきっかけは？

相撲が盛んな土地（青森県西津軽郡）で生まれ育ったので、いつも身近にあった。小学生のころは、すでにまわしを締めていましたよ。

――角界には、どのような経緯で？

漁師をしていたとき、知人が大島親方に私を推薦してくれたんです。軽い気持ちで大島部屋へ見学に行って、1週間で帰るつもりだったのに、気がついたら、そのまま新弟子検査を受けていました。

――初土俵から1年で新十両、翌年には新入幕と、とんとん拍子の昇進でしたね。

母に親孝行がしたくて、「1年で十両に上がる」と決めていました。昭和57年、十一月場所初日の2日前に母が亡くなった後は、入幕を目標に。そして、入幕後は「5年で大関になる」と心に決めていました。目標がないと、人間頑張れないものですね。

――横綱に昇進したときの気持ちは？

もちろん、うれしかったですね。しかし、横綱として土俵をつとめるのは想像以上につらく厳しいものでした。以前から膵臓炎を患っていたこともあって、横綱での優勝を目指し、せめて1年は頑張ろうと思っていました。その後はケガもあって、平成4年の初場所で引退しました。

◇

その翌年、安治川部屋を継承。部屋には現在、安馬、安美錦、安壮富士の3関取を筆頭に、18人の力士が所属する。また、呼び出しや床山（力士のまげを結い上げる職人）、世話人（雑務担当者）などが6人。部屋は、親方とおかみさん（淳子さん・44歳）を中心とした大家族でもある。

――相撲一色の毎日で、ほっとする瞬間は？

葉巻を吹かしているときかな。あと、特技でもある手品。「これでメシが食える」と自負しています（笑）。ギターやピアノも弾けるし、尺八は準師範。20代から始めたパソコンで、部屋のホームページも作りました。

――力士は器用な方が多いですが、親方も多才ですね。

要は〝いっちょかみ〟（関西弁で、何にでも興味津々で首を突っ込んでいくこと）なんです。で、ある程度上達すると、それで満足してしまう。そう考えれば、相撲だけは長く続いていますね。

――弟子を育てるうえで心がけていることは？

ただ強いだけの力士ではなく、社会に貢献できる、人として魅力のある力士を育てたいと思っています。

うちの部屋では、早いうちから私や関取の付け人にして、いま何をすべきかを瞬時に考える訓練を積ませます。判断力は勝負にも不可欠ですから。

厳しいことも言いますが、あいさつや礼儀、他者への思いやりなど、人として当たり前のことがきちんとできる子は、必ず強い相撲取りになりますね。

――今後の抱負を。

2月末にようぼくの仲間入りをしました。教えに沿った心づかいを忘れず、師弟一丸となって相撲道に精進したいと思います。

おおばで巡業、というのが夢ですね。土俵さえあれば、喜んで駆けつけますよ。

安治川正也（あじがわせいや）。本名・杉野森正也。近畿大学中退後、故郷・青森で漁業に従事していたが、スカウトを受けて角界へ。昭和56年1月初土俵。わずか18場所で三役に駆け上がり、大関2場所目の63年1月、横綱・千代の富士を破って初優勝。平成2年の九月場所で第63代横綱に昇進した。懐の深さを生かした相撲が持ち味で、体が柔らかく、捕らえどころのないことから〝津軽なまこ〟の異名も。優勝4回、生涯戦績575勝324敗。平成4年に現役引退。明愛分教会ようぼく。46歳。

立教170年（平成19年／2007年）3月11日号

「三月場所」前に参拝

襲名披露激励会も

伊勢ヶ濱部屋

大相撲・伊勢ヶ濱部屋の力士らが1日、来訪。9日から行われる三月場所（大阪場所）を前に参拝した。また、三段目と序二段の力士ら4人が別席を運んだ。

同日夜には、前真柱様ご臨席のもと、伊勢ヶ濱襲名披露の激励会が開かれた。

1日午後、元横綱・旭富士の伊勢ヶ濱親方（47歳・明愛分教会ようぼく）をはじめ、安馬関（23歳・同）、安美錦関（29歳・同）、安壮富士さん（32歳・同）ら一行は、南礼拝場で参拝した後、教祖殿、祖霊殿へ。

およそ30年来、三月場所の際には明愛分教会（森田定之会長・大阪市）を宿舎としている伊勢ヶ濱部屋。部屋の力士らは毎年、場所の初日前に本部神殿に参拝し、別席を運んでいる。

昨年11月、親方が年寄「伊勢ヶ濱」を襲名。部屋の名称も「安治川部屋」から「伊勢ヶ濱部屋」へと改称。横綱・照國や大関・清國ら数々の名力士が輩出した名門が、ここに復活した。

伊勢ヶ濱親方は「名門の部屋の名に恥じぬよう努力を重ね、力士たちにも教えの精神を忘れずに頑張ってもらいたい」と語った。

自己最高位の東関脇となり、大関昇進を目指す安馬関は「ファンに喜んでもらえるよう、いい相撲を取りたい」と決意を語った。東前頭二枚目の安美錦関は「体調に気をつけて、自分の相撲を取り戻したい」、東幕下三枚目に番付を下げた安壮富士さんは「関取にカムバック！」と、それぞれ抱負を述べた。

夕方、敷島詰所で行われた「伊勢ヶ濱襲名披露・大阪場所激励会」には約60人が出席。前真柱様の激励を受けた力士らは、三月場所での活躍をあらためて誓った。

席上、安壮富士さんらが相撲甚句（じんく）『当地興行』を披露。途中、歌詞の一部を「再びおぢばへと参ります」と替えて歌うと、出席者から大きな拍手が湧（わ）き起こった。

参拝後、本部玄関へあいさつに訪れた伊勢ヶ濱親方（右）ら（1日）

わたしと天理

安治川親方

元横綱・旭富士

巧みな技と端整な容姿で昭和・平成の相撲ファンを魅了した、第六十三代横綱・旭富士。現在は安治川親方として後進の指導に心血を注いでいる。十五年前に初めて天理を訪れて以来、天理とのかかわりを大切にし、今年二月にはようぼく（本文参照）となった。秋場所四日目、東京都江東区の安治川部屋を訪ね、天理の町・人の印象や指導方針などを伺った。親方の信条に息づく天理教の教えとは。

あじがわ・せいや
本名・杉野森正也。1960年、青森県生まれ。近畿大学中退後、故郷で漁業に従事していたが、スカウトされて角界へ。初土俵は81年1月。わずか18場所で三役に駆け上がり、大関2場所目の88年1月、横綱・千代の富士を破って初優勝。90年の9月場所で第63代横綱に昇進した。優勝4回。殊勲賞2回、敢闘賞2回、技能賞5回。生涯戦績575勝324敗。92年に現役を引退し、翌年、安治川部屋を継承。

陽気ぐらしの教えが指針

礼儀と他者への思いやりを重んじ、人として魅力ある力士育てたい

Ajigawa Oyakata

本部の神殿や「おやさとやかた」のスケールの大きさもさることながら、あれだけの広大な神苑に砂利がきれいに敷かれていることに驚き、圧倒されました。これが、初めて天理へ行ったときの第一印象です。

天理の人々とのかかわりも、私にとっては特別なものがあります。中山善衛・前真柱様（真柱＝天理教の統理者）は非常に相撲がお好きで、うちの力士もかわいがっていただいていますし、敷島大教会（明愛分教会の上級教会）の山田忠一会長も何かと心に掛けてくださり、このあいだも部屋を見に来てくださいました。本当にありがたいことです。

うちの部屋は三月場所で大阪へ行ったとき、明愛分教会（大阪市東成区）を宿舎にさせていただいています。私が言うのも何ですが、二十五年ほど前からお世話になっていますので、教会はわが家のようなものです。今年二月に安美錦や安馬らと共

「陽気ぐらし」という言葉が
一番好きです。
うちの部屋でも、みなで毎日を
楽しく過ごすということを
モットーにしています。

Ajigawa Oyakata

におさづけの理（病む人を救けるための手段として、親神から渡される授けもの）を戴きましたので、ようぼく（おさづけをもって人を救け、教えを伝え広める陽気ぐらしの担い手）として教会の朝づとめと夕づとめには必ず出て、おつとめを勤めています。

天理教の人は総じておとなしく、どんなことがあっても怒らないという印象があります。やはり陽気ぐらしの教えが根底にあるからなんでしょうね。

私は、天理教の教えの中で「陽気ぐらし」という言葉が一番好きです。うちの部屋でも、皆で毎日を楽しく過ごすということをモットーにしています。ただ、相撲部屋は団体生活です。一人で暮らしているわけではありませんので、ただ楽しければいいというのではなく、周りの人の気持ちを慮ることを忘れてはなりません。

そして、普段は和気あいあいとしていても、いざ土俵の上では気合を入れて相撲に集中する。そういう心の切り替えをうまくやることを心掛けています。

うちの部屋には暗い雰囲気の力士が一人もいないんです。これも天理教の教えのおかげかなと思いますね。弟子を指導するうえで、天理教の教えから得るものは非常に大きいんです。

私は、礼儀を尽くし、他者を思いやることが人として一番大事なことだと思っています。相撲が強いだけではなく、そうした精神を持った魅力ある力士を育てていきたいと思います。

一年のうち、ここにいるのは半分ぐらいのもので、あとは場所や巡業などで全国を点々としていますので、なかなか天理へ行く時間がないんですが、年が明ければ三月場所（大阪市）もあります。久しぶりに天理へ行って本部に参り、日ごろのお礼を申し上げたいと思っています。

物静かではあるがユーモアがあり、厳しさと優しさを併せ持つ安治川親方。弟子たちは、日々の地道な稽古で鍛え上げた強靭な肉体を持つだけでなく、親方が現役時代に培った技能と、人としての生き方を確実に受け継いでいる。まさに心・技・体、すべてを兼ね備えた安治川勢が角界を牽引する日はそう遠くない、そんな確信にも似た予感を抱いた。

昨年、大阪三月場所の直前に天理を訪れ、本部神殿に参拝した安治川親方（左）と安馬関（中央）、安美錦関（右）

司馬遼太郎が見た旭富士

「私は相撲ファンというほどではないが、旭富士が好きだった。

容貌、躯幹ともに玉のように玲瓏としているのに、感情がいつも出口をうしなったようにとまどっていて、悲しいときに笑ったり、腹をたてたときにほのかに微笑しているような、いかにも津軽人らしいところがいい。

現役時代の晩年には、栄養をとるとまずいような病気になっていて、ときには粥だけで、相撲をとり、技術で勝った。まことに、勇者だった。

煮詰めたような合理主義でありながら、勝てばいいという相撲ではなく、つねに美しかった。……」

『街道をゆく　41』「北のまほろば」（朝日新聞社刊）から

早朝から数時間、黙々と稽古に打ち込む力士たち

親方自らぬか袋で上がり座敷を磨き上げる

稽古後、きれいに掃き清められた土俵。中央に盛り土をし、御幣が立てられる

全 5 ページ